

# 令和 5（2023）年度第 3 回 伊丹市人権教育・啓発推進会議

【開催日時】 令和 6 年（2024 年）1 月 22 日（月） 13 時 30 分～15 時 00 分

【開催場所】 伊丹市立人権啓発センター 大集会室

【出席委員】 森田委員、松山委員、奥村委員、平野委員、林委員、池田委員、方委員、寺岡委員、落合委員（9 名出席）

【欠席委員】 波多江委員

【事務局】 市民自治部長、市民自治部参事、共生推進室長、人権啓発センター所長、人権啓発センター職員、人権教育室主幹、人権教育室職員、同和・人権・平和課長、同和・人権・平和課職員

【議事録確認委員】 奥村委員、平野委員

【傍聴者】 9 名

【内容】

- 1 推進会議委員による人権講演及び意見交換  
演題：「負の連鎖を断ち切るために」

## 【会議内容】（要旨）

- 委員長 今年に入り能登半島地震が起こり、被災者の方は大変な思いで過ごされている。また、飛行機火災等もあり、新年早々災害等の始まりの年であった。政治のほうもどうなっていくのか。この先、どんな年になっていくのか心配であるが、本日もどうぞよろしくお願ひしたい。
- それでは本日の会議に入る。
- 今回の会議はいつもの議題に対して各委員に意見を述べてもらうものではなく、人権講演をされている落合委員ご夫婦に研修を依頼したとのことである。前回の会議の中でも、落合委員から「子どもの人権」と「障がいのある人の人権」について意見をいただいた。今回は、人権啓発推進委員である落合夫人と一緒に普段していただいている講演内容を聞いていただき、「子どもの人権」と「障がいのある人の人権」についての意見を述べていただきたい。
- それでは、講演準備等を終えたあと、講演を実施する。

### （講 演）

- 事務局 今回講演していただいたのは、落合可奈子さんとパートナーで本推進会議委員の落合厚志さんである。落合さんご夫婦は、幼少期から青年期にかけての虐待・ネグレクトの体験を歌と劇にし、講演活動を行っておられる。そのひたむきな生き様と心ふるわす歌声が多くの人々の共感を呼び、数々の講演を通して、勇気を与えておられる。
- 続いては、資料等を用いて、講師である落合さんご夫婦から虐待等の子どもの人権や障がいのある人の人権についてお話しいただく。

- 講師 私の方からこういった活動に至る経緯などをお話させていただく。
- まずは、このような講演をさせていただき機会をいただき、本当にありがとうございます。推進会議委員の方や、傍聴の方、市の職員の方も聞いていただいた。
- 虐待をどう説明しようかと考えてきたことがあるので、説明したい。
- 本日は折り紙を持ってきた。折り紙を心に例えて説明させていただく。
- 心にダメージが与えられるとくしゃくしゃとなっていく。一定のダメージまでならば、時間がたてば自然に直っていく。ところが一定のダメージ以上になると自然にはもう戻らなくなる。この段階で自然に直すダメージしか受けたことない人と、自然には直らないダメージを受けた人で大きな壁ができてしまう。一定以上のダメージを受けた人は、自然に直すダメージしか受けたことがない人から、例えば、「時間が経ったら直るよ」や「こういうふうにしたらいんだよ」などの様々なアドバイスを受ける。
- しかし、一定以上のダメージを受けると自動的に回復はしない。むしろ、アドバイスをすればするほど、「何で私はできないんだろう」ということで、ダメージがどんどん膨らんでいく。こうしてどんどんダメージを受けていく。ある段階で精神病などの様々な症状が出てきて、思考力の低下や感情、五感なども鈍ってくる。判断力や善悪の判断なども無くなっていく。こういった状態は非常にしんどいので、何とかごまかすために依存症になったり、或いは似たような人が集まって犯罪紛いに手を染めるなどがある。今でいうと、ニュースなどで話題になっ

ているト一横など、そういったところに集まる。そして、さらに悪化していく。

例えば、自殺を試みるような非常に追い詰められた状態になったり、或いは殺人に至るなどがある。この状態の人とそうでない状態の人が付き合って、上手くいくということはない。

例えば、子どもが生まれたとする。親がこの状態、ストレスが強い状態であれば、不安も強いし、まともな生活というのは成り立たない。そこに生まれた子どもは、両親がその状態であるということだけで非常に深刻なダメージを受けている。親のケンカなどもあり家の中がこういった状態だと、なかなか親は子どもとうまく関わることができない。市の職員や児童相談所職員が通報を受けて訪問した際に、「あなたのしていることは虐待ですよ」と伝えられる。親は今後気を付けないといけないと思い、行動する。そういう状況だけを見た場合、虐待してないようであれば、支援が終了。また、子どもが成人したりしたら、支援は終了となってしまう。虐待がそれでも続く場合は、保護しなければならないということで、この状態の子どもたちが施設に集まる。しかし、この状態の子どもがいっぱい集まっても、うまく生活できるわけでもなく、そのまま成人して同じように子どもが生まれる。そういうのが今の社会の現状である。

では、この状態をどうすればいいかということだが、様々なことが必要であるが、まずは安全な場所に避難しないと行けない。この状態の人に囲まれている状態だと改善できないので、安全なところに行かないと行けない。その次に、専門的なアプローチの取組が必要。このくしゃくしゃになっている状態を回復していくのだが、これは他人にはできない。本人が本人の力で開いていくしかない。しかし、開くためには2倍、3倍の力が必要になってくる。いろんな方法があるが、やはり薬が必要である。特に寝られないというのがすごく多く、寝られなくなると命に直結するので、とにかく早く精神科などに行き、睡眠薬等をもらい利用する。しかし、病院も様々あり妻も何件が行ったが、医師から「そんな親が居るわけない。あなたの妄想だ。」と言われることもよくある。虐待のことをよく知って対応してくれる病院というのなかなか少ない。色々あるが、医者に診てもらうことは絶対に必要である。そして、少しずつ回復していくのだが、非常に長い期間が必要。この行動が早ければ早いほどいいのだが、大体多いのが40・50代になってから回復の取組を始めることが多い。その後、「私ってこんな形をしていたんだ」と気づき始め、そこからやっとその人の人生が始まる。そういうことで頑張っている状態が今の可奈子さんである。

可奈さんは、「もうとてもこんなビリビリでかっこ悪い、こんな恥ずかしい、自分は嫌や」といつも言っているが、私は「いやいやそんなことはないよ」と、「今の姿や歌・演技が必ず役に立つことがあるよ」ということで説得しまして何とかやっているというのがこの講演ということになる。

いったん、ここまでで私の話は終わろうと思う。

なにか質問等はあるか。

#### A 委員

私は講師である落合さんたちご夫婦の出会いを聞いて、いい出会いはあるんだと思った。丸ごと受け入れてくれるというか、そういう人と出会えてよかったなと思う。今聞かせていただいた置かれている立場というのは、いろんな折り紙の形をした人がいると思う。それこそ、食べることができなくて苦しんで生きている人もたくさんいると思う。私は今日の講演を聞いて、今の社会のどこを見ながら生きていくかという新たな気持ちをもたらしたなと思った。

委員長 私は自立相談課に所属し、生活保護を受けている子どもたちの就学に関わっている。まさに同じような状況にある子どもというのはたくさんいる。私は35年間、教員という立場で子どもたちと関わってきたが、歌を聞き歌詞を見ながら、やはり教育していく中で、教員がもっとももっといろいろなことに気づかないといけないなとすごく感じた。そのためにも、教員は様々なことを学んでいくということが非常に大切であると感じる。障害のこと一つについても本当にいろんな形態があり、特に今言われているのは発達障害、ADHDなどの子どもと対峙するとき知識がないといけないとすごく感じる。そのために勉強もしっかりとしなければいけない。それから、親の生活背景や子どもたちの生活背景をしっかりと見ていかないといけないというのもすごく感じている。

教員を引退した身であるが、そういう関わりを通じて、学校の先生方に広がっていけばいいなと改めて思った。伊丹の中にも、まだまだそういう子どもたちがたくさんいるということも知っていただき、その子どもたちの人権をしっかりと守れるようにしていける、していくお手伝いができれば嬉しいなと思っている。いろんな立場がある中で、様々な思いがあったのではないかと思いますので、各委員、感想や意見を言っただけたらと思う。

B 委員 私も長年教員をしてきて、当時の子ども時代の落合さんが体験されたようなこと、そういう状況であった子どもがたくさんいたのかな、私は見えていなかったのではないかと思います、自己嫌悪になるところがあった。

落合さん自身が自分の心で、自分から自分のことを否定するのではなく、ここから脱出するのは自分なんだと気づかれたきっかけや、心の変化はどこから来たのか。どういった気持ちで落合さん自身を立ち上げらせるのか前向きに生きていこうと思うようになったのか。そのあたりのことも教えてもらえたらありがたい。

講師 自分の気持ちをごまかすためにアルコールに走ったり、リストカットしたり、薬を飲んだりするが、それ自体もしんどい。こんな状況はしんどい、おかしいという気持ちはずっとあったと思う。周りの人に助けをもらおうとか、なんとかしてもらおうという気持ちがすごく強かったがそれをしてもしんどい。「なんで私の思うように動いてくれないのか」なども思うこともあったが、自分でやらないといけないと思うようになった。向き合うこと自体もしんどかったが、どっちにしろしんどい思いをするなら、とことん向き合おうと思った。そう思いながら、本を読んだり、ワークショップに参加したりした。そうすることで「自分ってこういう人やったんや」と思うようになり、「自分と同じ思いをしている人はたくさんいる」と知った。

子育てしていくうちに、自分の息子に対して、「なんで言うことかへんねん」と思い、虐待紛いなことをしてしまうことがあった。このままでは殺してしまうかもしれないと思い、がむしゃらに本を読んだり、専門家のところに行ったりした。また、子どもにあたるのではなく、紙をくしゃくしゃにしたりもした。子どもや家族の存在は大きかったと思う。

C 委員 今日ここに來させていただいて、大変よかったなと思った。  
私の高校の時の友達が、精神的にしんどい思いを抱えていて、30年前に駅では

ったり会って電話番号を交換した。友達から心の病気であること、根底に虐待があること、親から大事にされなかったこと、大体1週間に1回くらいのペースで電話がかかってくるようになり、それが30年くらい続いている。だいたい同じ話が繰り返し話される。私がこうしたらと言える立場ではないし、それが入っていないというのはわかったので、私は聞くことに専念している。病院もきちんと受診しており、薬も飲んでる。友達の親は早く死んでおり、それ以降は友達も自由なのだが、30年経ってやっと明るい兆しが見えてきたのかなと感じている。今後も電話はあると思うので、講師の落合さんに今後ご相談させていただくかもしれないので、どうぞよろしくお願ひしたい。

- D 委員 定時制高校の教員を長年していて、たくさんの生徒と関わってきた。その中でリストカットを繰り返す生徒がいて、生きるためにカットしているということを感じた。また家を訪問した際に、玄関までゴミが転がっており、家の中に踏み入ることができない生徒もいたし、数百円で1日を過ごさないといけない子など、いろいろあった。夜、家庭訪問をしたとき生徒とばかり話しをしていて、帰り際に身体障がいがある保護者がいざりながら出てこれ「お願いします」と言われたこともあった。
- 今50歳半ばくらいで、初めて教員になったときで出会った生徒であるが、その生徒から今も電話があり、私はその悩みをじっくりと聞くようにしている。昨今は自己責任ということで、つまりは「頑張らないのは本人が悪い、甘えているんだ」や「自分のことは自分でしなさい」という社会的な風潮で、不寛容、優しさが無い。またコスパなどとそういう効率ばかり追って、人間関係もだんだん希薄になっていて住みにくい社会になっている傾向にあると思う。色々話を聞いて「そうか。そうか。また電話かけてきや」と伝えている。
- 今回は、講演で人間は極限を超えると整理できない「くしゃくしゃの状態」であるということが分かりやすかった。まずは知って理解することで、いろんな行動がうまれるのかなと思った。

- E 委員 落合さんの講演を2回ほど聞いたことがあったが、初めて聞かせていただいたときに、こういう環境で育った方がいるんだと感じた。虐待を知らないわけではないし、たくさん聞いてきたが、現実にそれを自分の口から言える、歌にして、みんなにわかってもらって活動をしている方がいるんだと思った。発表されたように、幸せな生活を送っていると聞いてほっとした。それからも落合さんとは、人権部会でずっと一緒に、管外学習に行ったりしている。落合さんは笑うとかわいいので、事情を知っている私はいつもほっとしている。時間はかかると思うが、ずっとこういう活動を続けていただきたい。虐待やいじめを受けて育ってきた心を病んだ子どもたちなどに、こんなに回復した自分がいるんだということを伝えてあげて欲しいなと思った。

- C 委員 結構いろんな本を読んだりしているが、大体「虐待は連鎖する」で終わることが多く、「それからどうするの?」というのがなかなかない。そこからのことが知りたいとずっと思っていたので、落合さんに出会って、話を聞けてとても貴重であった。これからも素晴らしい活動を続けてほしいと思う。

講師 いろんな意見をいただき、ありがとうございました。

講演の中で可奈子さんがコーラス部に入るという話をしたが、その時のコーラス部は私が部長で1人しかいなかった。3・4ヶ月ぐらいいは2人っきりの活動であった。何回か練習しているうちに仲良くなり、可奈子さんが詩を書いたりするのが好きということで、私も別に作曲ができたわけではないが曲を作るのに興味があつた。可奈子さんの詩に曲をつけようとなり詩を見せてもらった。感動とは少し違うが、最初に出来た曲が「どうしてこんなに」というもので、その詩を読んだときにすごく心が動かされたというのが一番近い。衝撃を受けたって言ってもいい。どこかで披露しようということで、定時制の高校だったので生活体験発表会というものがあつた、審査の待ち時間に余興という形で披露させてもらった。すごく評判がよく、すごい心に響いたということで好評いただいたので、これからもやっていこうということで活動が始まり、この活動を始めて20年が経つた。曲自体はそんなに変わっていないが、7年前にこの場所で披露した時から子ども時代の演技を取り入れたスタイルにした。今日の講演を聞いていただいて、少しでも心が動く、得るものがあつたなど思われた方は、ぜひお声掛けしていただきたいと思う。

A 委員 頑張ってもらえたらうれしい。私たちも、もちろん生かしていきたいと思う。

講師 この資料の中にもコミュニケーションのことが書いてあるが、可奈子さんが頑張つて回復する横で私も自分はどうかしたのかなということ、自分の自分との関わりそれから人は変われることをずっと学んできた。私たちの関係は当然すごく良い関係になっており、お互いのよさを引き出せる関係。だから、ずっとよくなり続けている。

この講演も挑戦で、どういふふうにしたらもっと伝わるのか、2人で頭をひねりながら挑戦して、そこで2人の成長が感じられる。そういう親が頑張っている姿を子どもたちに見せると、子どもたちも応援してくれる。

事務局 時間も来たため、以上をもって講演と意見交換は終わりたいと思う。

委員長 今回の講演で人権意識や知識を深めることができた。各委員はそれぞれの機会を通じて伝えていただきたい。  
次に連絡事項について、事務局より願います。

事務局 (「人権教育・啓発白書スケジュール(予定)」を説明、次回会議の開催予定月について説明)

委員長 それでは以上をもって、第3回人権教育・啓発推進会議を終了とする。

令和6(2024)年 2月20日

確認委員 奥村 恵子

確認委員 平野 孝志